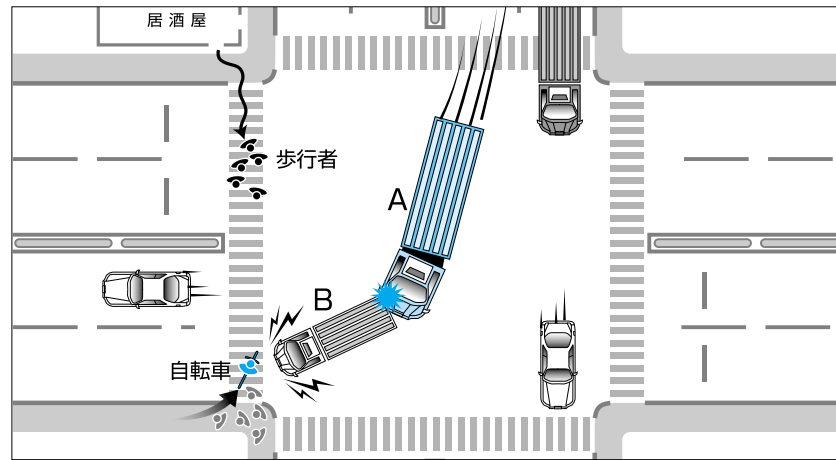


職場における交通安全指導

Part 68

事故事例に学ぶ
35

交差点で右折の際、トラックに追突



事故の概要

発生状況

日 時：平成19年2月某日 午後8時頃

天 候：曇り

道路状況

交通頻繁な市街地の片側二車線道路の交差点

事故の当事者

運転者A(4tトラック): 63才、男性

被害者B(2tトラック): 32才、男性

被害状況

A: 前部バンパー等破損、右足打撲

B: 頸椎捻挫、腰部打撲等(全治3か月)

事故状況

Aは、現在の会社は入社2年が経過したばかりであるが、今まで大型トレーラーを中心にトラック運転歴30年のベテランドライバーである。

当日は、会社を午前10時に出発し食料品・雑貨類等の搬送を終え、帰路に着く途中、会社を間近にして事故を起こした。

事故現場は、片側二車線の県道が交わる市街地の交差点で、官庁街や繁華街の近くに位置することから、普段から交通量が多く事故当時も夜間にもかかわらず、通行車両や帰路に着く横断者等で交通頻繁な状況であった。

Aは、事故現場の交差点を右折するため右側車線を走行していたが、一日の多忙な配送業務を終

え、会社を間近にし緊張が緩み、ホッとした気分で行っていた。

通行車両は連続進行中であったが、比較的スムーズな流れであったことから、Aはややスピードオーバー気味の前車に追従するような状態で同交差点に接近していた。

交差点付近に差し掛かった際、交差点の信号が青であったことから、右折態勢に入ろうと前方を確認したところ、対向車線も連続進行中の状態であり、交差点手前に設けられた右折帯には、乗用車を先頭にBのトラックが右折待ちをしていた。

そのうち、対向車線の通行車両が断続的になり、また、横断歩道上に歩行者等がないタイミングを見計らい先頭の乗用車が右折を終えた。

Bも続いて右折を開始しようとしたが、近くの居酒屋から出てきた4~5人の若い男女が、ほろ酔い機嫌でふらつきながら横断歩道を渡り始めたことから危険を感じ、様子を見ながら徐々に進行した。

若い男女が横断歩道を渡り終えたのを確認した後、Bは交差点中央付近からスピードを上げ横断歩道の直前に至った時、若者の乗った自転車が横合いの歩道からいきなり横断歩道に飛び出してきたので、横断歩道の直前で急停止し危険を回避した。

Aは、Bから多少間をおいて右折帯に進路を変え、スピードを緩めながら交差点手前まで進み前方を見たところ、その時Bは、スピードを上げながら横断歩道に接近中の状態であった。

Aは、若い男女が横断歩道を渡り終えたのを確

認しており、しかも周囲に人影がないことを目の当たりにして、Bの後から容易に右折ができるものと即断した。

Aは加速をし、Bに急接近したところで横断歩道の手前でBがいきなり急停止したので即応できず、B車の右後部に激しく追突しBに全治3か月の重傷を負わせたものである。

この事故の直接の原因は、Aが交差点で右折の際、前車が容易に右折できるものと思い込み、その動きに対して十分注意をしなかったこと、また、B車との間に咄嗟の場合でも危険を避けることが可能な車間距離を保持しなかったことである。

安全指導

ベテランドライバーの自覚

Aは、63歳のベテランドライバーであり、現在は4tトラックを運転し比較的日中の業務が多く、運転に伴う疲労の度合は少なかった。

しかし、30年を超える長いトラック運転歴のなかで大型トラック中心の運転業務を行っていたことから、相当に肉体的・精神的な疲労が蓄積されていたと思われます。現在の会社に転職したのも、3年前に重傷事故を起こし、体力的な不安、特に視力の低下を感じたからでした。

事故当時、交差点周辺は夜間にもかかわらず比較の見通しの良い状況でした。

Aは、交差点を右折する時に何度か前方を注視しましたが、その時点で交差点方向に接近中の自転車を発見できなかったのは、多分に視力の影響もあったのではないかと考えられます。

Aのようにベテランになれば、年を重ねる毎に運動能力や判断能力等の低下は否めません。ベテランドライバーはそのことを自覚し、時には視力等のチェックを行い適切な体調の維持・管理に努めましょう。

危険の予測運転

交差点は最も交通事故が多発し、重大事故の発生も顕著であります。

特に交差点を右左折する際は、交通事故に結び付く様々な危険要因が存在することから、ドライバーは、最大限の注意を払い慎重に走行する必要があります。

Aは交差点を右折の際、Bに続き右折することに気を奪われ、徐行することなく一気にBへ接近しました。

AがBに接近し過ぎると視界が遮られ、車両の

背後に見えない「死角」が広がり危険が増すため、Bの万が一の動静に気を配りながら、余裕のある車両間隔を保持すべきでした。

交差点を右左折する際は、歩行者や自転車が突然横断歩道上に飛び出し、その危険回避のため急停止した車両に対応できず、Aのように追突事故を起こすケースがよくあります。

ドライバーは、交差点通行時の危険性を十分認識し、運転する車両自体、また、周辺の車両や建物等、自分の目で捉えられない「死角」が多いことを常に念頭において、見えない「死角」に存在する危険を予めチェックし、余裕を持って危険回避ができるように「危険の予測運転」を実践しましょう。また、右折の際には、前車に追従するのではなく、一旦停止して安全を自分の目で確認してから右折することが鉄則です。

なお、当該事故に間接的に起因した歩道走行中の自転車は、交差点の歩行者用信号が青の点滅を始めたので、横断歩道や周囲の安全も確かめず、かなりのスピードで横断歩道に進入しました。

自転車が横断歩道に入った時は既に信号は赤に変わっていましたが、前走車のBは事前にこの自転車を認めていたので、瞬時に危険を回避することができました。

しかしAは、弱視力が影響したのか、歩道走行中の自転車を見落としており、また、直近では自転車がB車の死角に入り確認できなかったことから対応が遅れ追突事故を起こしました。

ドライバーは、このような歩道や横断歩道等での自転車の無謀走行、歩行者の身勝手な道路横断等をも予測した防衛運転が求められます。

夜間の運転

夜間は、ドライバーの視界が制限され視認性も低下するので、見落としや発見遅れによる事故の危険が増します。

スピードを控え車間距離に余裕を持って運転することは勿論ですが、運転には様々な悪条件も重なるので、何より慎重な運転に徹することが不可欠です。前方注視や周囲の安全確認を徹底しましょう。

気の緩みに注意

ドライバーが、仕事の緊張状態から脱して帰路でホッとした気分になった時、気の緩みから油断が生じ事故になることが少なくありません。

仕事を終えた安堵感等から、会社を間近にして油断が生じ、警戒心が希薄になったとも考えられます。油断から注意を怠り、漫然運転にならないように心掛けましょう。